

スポーツ庁 大学横断的かつ競技横断的統括組織  
(日本版N C A A) 創設事業 (大学スポーツ振興の推進)

成果報告書

平成 30 年 3 月

早稲田大学競技スポーツセンター



## 目 次

1 本委託事業の概要	1
1.1 事業趣旨・目的	1
1.2 事業の効果および評価方法	1
2 スポーツ分野の統括業務の実施状況について	4
3 大学スポーツ・アドミニストレーターの配置の状況について	4
4 先進的モデル事業の実施状況について	4
4.1 早稲田アスリートプログラム（WAP）のさらなる発展に向けた学業成績分析	4
4.1.1 早稲田アスリートプログラム（WAP）とは	4
4.1.2 卒業率	6
4.1.3 通算 GPA 平均値	8
4.1.4 基準単位未達率	9
4.1.5 まとめ	10
4.2 早稲田スポーツのブランド化と収益可能性の検討	12
4.2.1 早稲田スポーツブランド力向上につながる情報発信	12
4.2.2 収益力向上につながる可能性の高い具体的対洗出し	17
4.2.3 早慶戦シリーズ（仮称）の実現に向けた検証	19
4.3 大学スポーツ・アドミニストレーターの育成と活用	28
4.3.1 大学スポーツ・アドミニストレーターの配置	28
4.3.2 早稲田大学「大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」の開発・実施・検証	29
4.3.3 海外視察の実施	33
4.3.4 「大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」の評価・検証	42
4.3.5 まとめ	46

## 1 本委託事業の概要

### 1.1 事業趣旨・目的

今回の委託事業実施を通して、「早稲田スポーツの目標」を実現するとともに、日本の大学スポーツの新たなモデルを提案したい。そのため、以下の3施策を柱とする事業計画を実行していく。

- (1) 早稲田アスリートプログラム（WAP）のさらなる発展に向けた学業成績分析
- (2) 早稲田スポーツのブランド化と収益可能性の検討
- (3) 大学スポーツ・アドミニストレーターの育成と活用

また、競技スポーツセンターの事業を高度化させていくため、大学スポーツ・アドミニストレーターを活用し、各種調査・分析および実行を進めていく。大学スポーツ・アドミニストレーターが担う業務は、上記(1)～(3)が中心となるが、その他の関連事業にも積極的に関与していく。

### 1.2 事業の効果および評価方法

#### (1) 早稲田アスリートプログラム（WAP）のさらなる発展に向けた学業成績分析

評価視点	評価指標
①学業成績分析	1) 成績情報が統計分析されたか。A →達成 (4.1 参照) 2) 結果が WAP 委員会に報告されたか。A →一部達成 【理由】委員で検討した結果を4月以降に開催される WAP 委員会で報告予定。 3) 比較対象（一般学生等）との比較がなされたか。 B →未達成 【理由】学生情報に関する非公開データがあり、統計的な比較には至らなかった。
②検討結果の活用	1) 統計分析結果を学内外に伝えられたか。A →一部達成 【理由】一部の学内関係箇所と共有した。 2) 分析および情報発信の結果を、次の施策に応用できたか。B →一部達成

	<p>【理由】成績情報に関する重要な事項については、学生の所属学部と速やかに共有し、協働して学生支援を進めていくこととなった。</p>
--	---

(2) 早稲田スポーツのブランド化と収益可能性の検討

評価視点	評価指標
①早稲田スポーツブランド力向上につながる情報発信	<p>1) 体育各部および現役学生・著名な出身者の活動状況の把握と効果的な発信ができたか。A →達成 (4.2.1 (2) 参照)</p> <p>2) WEB サイト、SNS 等にスポーツ情報を掲載することができたか。A →達成 (4.2.1 (2) ①参照)</p> <p>4) 年間のスポーツ情報・結果を効果的に集約し成果物としてまとめられたか。A →達成 (4.2.1 (2) ③参照)</p>
②収益力向上につながる可能性の高い具体的な対象の洗い出し	<p>1) 具体的な対象の洗い出しができたか。A →達成 (4.2.2 (2) 参照)</p> <p>2) 各対象の個別の問題（法務、権利等）の把握が進んだか。B →達成 (4.2.2 (3) 参照)</p>
③早慶戦シリーズ（仮称）の実現に向けた検証	<p>1) すべての体育各部の早慶戦実施状況が把握できたか。A →達成 (4.2.3 (1) 1)参照)</p> <p>2) 開催に向けた具体的な課題が把握できたか。A →達成 (4.2.3 (1) 5)参照)</p> <p>3) 実現性が検証できたか。A →一部達成</p> <p>【理由】慶應義塾大学との打ち合わせを実施。両大学の特徴を活かした形での実現可能性について意見交換を行った。今後、具体的な課題整理を行いたい。</p> <p>4) 収益性が検証できたか。B →一部達成</p>

	<p>【理由】 会場規模の問題等もあり、イベント単体による収益の確保は困難であるが、早慶戦シリーズという事業インパクトを効果的にアピールすることにより、寄付を含めた卒業生からの支援や、その他の事業との連携による収益確保の可能性はある。</p>
--	---

(3) 大学スポーツアドミニストレーター(SA)の育成と活用

評価視点	評価指標
①SA 育成プログラムの構築	<p>1) 学内外専門家による、大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラムが実行できたか。A →達成 (4.3.2 参照)</p> <p>2) 理解度測定試験が実施できたか。A →達成 (4.3.4 (1) 参照)</p> <p>3) 受講者へのアンケートにより内容の評価ができたか。A →達成 (4.3.4 参照)</p>
②海外視察の実施	<p>1) 海外の優れた大学の実態を確認できたか。A →達成 (4.3.3 参照)</p> <p>2) 視察の結果を、早稲田スポーツに活用するための検証ができたか。A →達成 (4.3.3 (2) 参照)</p>
③新規雇用 SA の各種業務の実施	<p>1) 本委託事業に関する業務を実行できたか。A →達成 (4.3.3 参照)</p> <p>2) 早稲田スポーツ発展に寄与する各種施策の実行に貢献できたか。B →一部達成</p> <p>【理由】 44 部の基礎情報の集約を進めた。</p>

※各評価指標最後の A および B について

A : 確実に達成すべきこと

B : 達成することが望ましいこと

## 2 スポーツ分野の統括業務の実施状況について

早稲田大学では 2003 年度より競技スポーツセンターを設置し、専門的に競技スポーツの強化を行っている。今回の委託事業でも、組織構造上大きな変革を行う予定はない。ただし、十分な機能が備わっているわけではないため、今回の事業を通じて、早稲田アスリートプログラム (WAP) の発展、早稲田スポーツのブランド化と収益可能性の検討、大学スポーツ・アドミニストレーターの育成を行った。

## 3 大学スポーツ・アドミニストレーターの配置の状況について

競技スポーツセンターには、1名の所長、3名の副所長がおり、他業務と兼務ながらも専従のスタッフが6名在籍している。特に専従スタッフ(大学職員)は、配属以来、早稲田スポーツに関する業務に携わっている者であり、新規に採用した大学スポーツ・アドミニストレーターは、外部で経験を積んだ者ではなく、今後の大学スポーツや日本のスポーツ界を担っていく若いメンバーを2名選定・雇用した。彼らが大学スポーツ・アドミニストレーター講座や海外視察等を通じて学んだことが、将来の大学スポーツを支えていく基盤となるはずである。1名は日本代表クラスのレベルのトップアスリートであり、もう1名は、早稲田大学体育各部で主将を務めた後、博士後期課程に進学し現在も研究中である(詳細は、「4.3.1」参照)。

## 4 先進的モデル事業の実施状況について

### 4.1 早稲田アスリートプログラム (WAP) のさらなる発展に向けた学業成績分析

本学では、2014年より早稲田アスリートプログラム (WAP) を実施しており、学生アスリートの修学支援、人格陶冶、競技生活の充実を目的とした教育指導を行っている。修学支援については、これまで体育各部員の修得単位数・GPA等の把握による成績優秀者の表彰、単位不足者への指導を行ってきたが、今回、体育各部部員全体、学部、所属体育各部、入試区分別に卒業率、通算GPA平均値、基準単位未達率を定量的に把握することで、WAPの効果検証を行うとともに、今後の修学支援施策の検討材料とする。

なお、米国NCAAにおいては、Divisionごとに厳しい成績によるクライテリア(試合参加エリジビリティ)が定められており、本学の実績が、先行事例として日本版横断的統括組織における展開の一助となれば幸いある。

#### 4.1.1 早稲田アスリートプログラム (WAP) とは

早稲田アスリートプログラム (WAP) を開始したのは2014年4月1日である。

これを開始するまでのステップとして、競技スポーツセンターがセンター内の準備委員会や管理委員会での検討を経て、学内の各種会議や個人情報保護委員会での説明や了解手続きを行った。また、体育各部の部員や部長、監督への説明や承認手続きを経てWAPを実現した。

WAPの修学支援プログラムの柱は、①学業情報管理、および、②褒賞である。前者は、競技スポーツセンターが体育各部部員の学業情報（登録単位数、取得単位数、GPA）を学期ごとに把握し、原則として標準修業年限（4年）で卒業できるよう指導するものである。後者は、GPAの高い部員・部を表彰するものである。

### （1）学業情報管理

当プログラムでは、体育各部部員が学業成績不良となることを未然に防ぎ、標準修業年限での卒業を実現するため、「a 要指導単位数」および「b 最低基準単位数」を設置し、各学年・各学期に要指導単位、基準単位を下回った学生に対し、所属する学部および体育各部部長と連携して指導を行っている。最低基準単位については、所属学部の指導対象よりも高く設定されている。

具体的には、「a 要指導単位数」を下回った学生に対しては、部長に対する学業成績報告の際にその旨をあわせて報告し、部長による特段の指導を行っている。また、「b 最低基準単位数」を下回った学生に対しては、①最低基準単位数を初めて下回った学期に警告、②2学期以上連続で下回った場合、原則として i) 練習の制限、ii) 対外試合の出場停止、といった措置を含めた指導を部長に依頼している。また「指導内容」を競技スポーツセンターに報告するとともに所属学部にも報告している。

表 1

要指導単位数・最低基準	A 要指導単位数		B 最低基準単位数	
	春学期終了時	秋学期終了時	春学期終了時	秋学期終了時
1年	14 単位	28 単位	12 単位	24 単位
2年	42 単位	58 単位	38 単位	52 単位
3年	74 単位	92 単位	68 単位	84 単位
4年	108 単位	124 単位	100 単位	124 単位

単位数

### （2）褒賞

当プログラムでは、学業成績向上のインセンティブとして、以下の通り成績優秀者を褒賞している。

- ① 最優秀学業成績団体賞：部員の年度 GPA が最も高い部
- ② 優秀学業成績団体賞：部員の年度 GPA が 2 位、3 位の部
- ③ 最優秀学業成績個人賞：4 年で卒業する部員のうち最も高い通算 GPA を獲得した者
- ④ 優秀学業成績個人賞：4 年で卒業する部員のうち上位 10%の通算 GPA を獲得した者
- ⑤ 年間最優秀学業成績個人賞：3 年生以下の学年ごとに、当該年度履修科目において部員のうち最も高い年度 GPA を獲得した者
- ⑥ 年間優秀学業成績個人賞：3 年生以下の学年ごとに、当該年度履修科目において部員のうち上位 10%の年度 GPA を獲得した者

### (3) 早稲田アスリートプログラム (WAP) の検証

今回の学業成績分析は、2011 年～2016 年に入学した学生を対象としている。WAP は 2014 年より開始したため、2011 年から 2013 年に入学した体育各部部員はそれぞれ 4 年生開始時、3 年生開始時、2 年生開始時に、WAP の適用となっている。2014 年以降に入学した部員は、WAP 受講を前提に入学していると言える。次項より、卒業率、通算 GPA 平均値、基準単位未達率の集計結果を報告する。

#### 4.1.2 卒業率

##### (1) 卒業率 (入学年別)

2011 年～2013 年に入学した体育各部部員の卒業率<sup>1</sup>を「入学年別」で見ると、2011 年入学が最も高く、2012 年入学が最も低い結果であったが、統計的有意差は見られなかった。

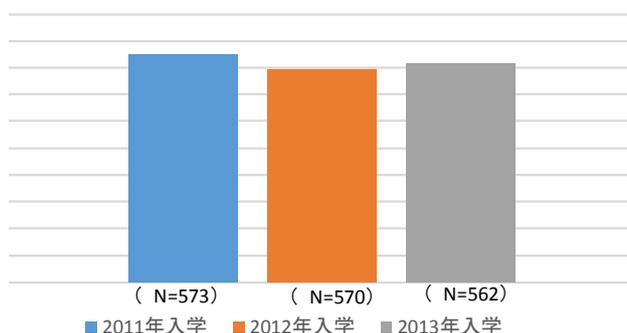


図 1 卒業率 (2011 年～2013 年入学者)

<sup>1</sup> 卒業率：2011 年～2013 年入学者のうち、各年 4 月入学で 3 月 15 日測定時に「3 月卒業 (修了)」評価の学生を集計 (卒業年数は 4 年が大多数だが、3 年～5 年を含む (5 年については積極的な休留学者を考慮し今回は含めている))。

## (2) 卒業率（学部別）

2011年～2013年に入学した体育各部部員の卒業率を「学部別」(※)に見ると、2012年、2013年入学の学年において学部間に有意差が見られ、最も卒業率が高い学部と、最も低い学部では大きな差が見られた。

一方、3年間の結果は一定ではないため、特定の学部が高い、または低いという傾向があるとは言えない。また、各学部により成績評価基準や卒業の難易度が異なる点は留意する必要がある。

※13 学部：政治経済学部、法学部、文化構想学部、文学部、教育学部、商学部、基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部、社会科学部、人間科学部、スポーツ科学部、国際教養学部

## (3) 卒業率（体育各部別）

2011年～2013年に入学した体育各部部員の卒業率を「体育各部別」(※)に見ると、各年とも、体育各部間に統計的有意差が見られた。最も卒業率が高い部と、最も低い部では大幅な差があり、体育各部によって大きな違いがある結果となった。

一方、常に下位にあるような体育各部も見られるが、入学年によっても順位に違いが見られること、体育各部の所属人数にも差があることから、特定の体育各部が高い、または低いという傾向があるとは言えない。

※44 体育各部：野球部、庭球部、漕艇部、剣道部、柔道部、弓道部、水泳部、競走部、相撲部、ラグビー蹴球部、山岳部、スキー部、スケート部、バスケットボール部、ア式蹴球部、馬術部、卓球部、ボクシング部、体操部、空手部、バレーボール部、レスリング部、自動車部、米式蹴球部、ヨット部、ハンドボール部、ホッケー部、フェンシング部、応援部、軟式庭球部、準硬式野球部、自転車部、バトミントン部、航空部、ワンダーフォーゲル部、ゴルフ部、ウェイトリフティング部、射撃部、合気道部、アーチェリー部、ソフトボール部、日本拳法部、ラクロス部、少林寺拳法部

## (4) 卒業率（入試区分別）

2011年～2013年に入学した体育各部部員の卒業率を「入試区分別」(※)に見ると、2011年においては入試区分間に統計的有意差が見られたが、2012年および2013年には有意差が見られなかった。

※9 入試区分：一般入試入学、センター入試入学、自己推薦入学、AO入試、推薦入学、スポーツ推薦、早稲田実業、本庄高等学院、高等学院（人数が1桁台の区分は除外）

### 4.1.3 通算 GPA 平均値

#### (1) 通算 GPA 平均値

2015 年～2017 年の体育各部部員の通算 GPA 平均値<sup>2</sup>を見ると、2015 年と 2016 年では 2016 年が 0.04 ポイント、2015 年と 2017 年では 2017 年が 0.07 ポイント高く、統計的な有意差も見られた。一方、2016 年と 2017 年では、2017 年が 0.03 ポイント高かったが、統計的な有意差は見られなかった。このことから、2015 年をベースとした場合、2016 年および 2017 年の通算 GPA 平均値は上昇したと言える。

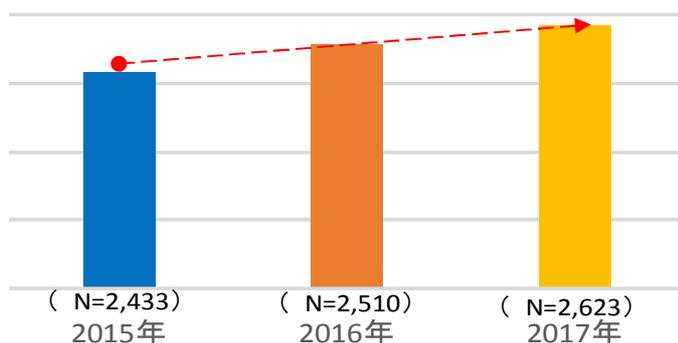


図 2 体育各部部員の通算 GPA 平均値

また、通算 GPA 平均値を「入学年度別」(2011 年入学～2016 年入学の 6 学年)に見ると、2012 年～2015 年入学のいずれの学年で毎年上昇傾向にある。2014 年に早稲田アスリートプログラム (WAP) が開始したが、その一定の効果があったと考えられる。

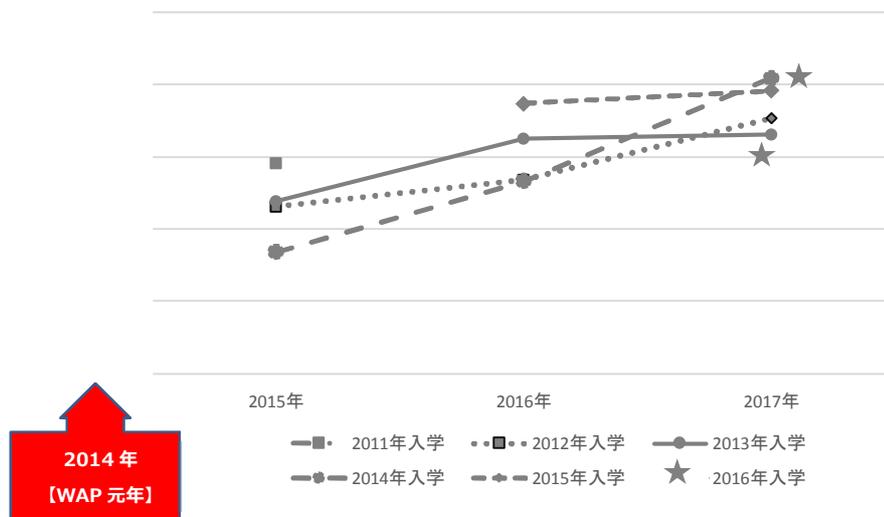


図 3 通算 GPA 平均値 (入学年度別)

<sup>2</sup> 通算 GPA 平均値：今回の集計条件として、9月入学の学生は除外した。

## (2) 通算 GPA 平均値 (学部別)

2015 年～2017 年の体育各部部員の通算 GPA 平均値を「学部別」で見ると、いずれの年においても統計的有意差が見られた。計測した3年間にわたって、通算 GPA 平均値が上位の学部と下位の学部はある程度固定されており、概ね毎年同傾向にある。ただし、各学部の成績評価基準や難易度が異なる点は留意が必要である。

## (3) 通算 GPA 平均値 (入試区分別)

2015 年～2017 年の体育各部部員の通算 GPA 平均値を「入試区分別」で見ると、いずれの年においても入試区分間の統計的有意差が見られ、通算 GPA 平均値が最も高い区分と最も低い区分では、大きな差が見られた。また、上位の区分と下位の区分はある程度固定されており、概ね毎年同傾向にある。一方、各入試区分での経年変化はほとんど見られなかった。

### 4.1.4 基準単位未達率

#### (1) 基準単位未達率 (全体)

2015 年～2017 年の体育各部部員の基準単位未達率<sup>3</sup>を見ると、各年で大きな差は見られないが、減少傾向にある。

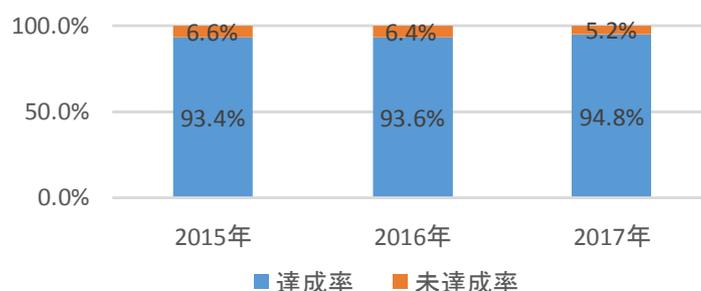


図 4 基準単位未達率 (全体) 2015 年～2017 年

<sup>3</sup> 基準単位未達率：基準単位は1年次終了時で24単位、2年次終了時で52単位、3年次終了時で84単位、4年次終了時で124単位であり、当該単位未取得の学生の割合を指す。今回は、「9月入学」および「休留学」のある学生を除いて集計した。

(2) 基準単位未達率（学部別）

2015年～2017年の体育各部部員の基準単位未達率を「学部別」で見ると、2015年および2016年は学部間に統計的有意差が見られ、未達率が最も高い学部と最も低い学部では差が見られた。

(3) 基準単位未達率（体育各部別）

2015年～2017年の体育各部部員の基準単位未達率を「体育各部別」で見ると、毎年体育各部間の統計的有意差が見られ、未達率が最も高い部と最も低い部では大きな差が見られた。

(4) 基準単位未達率（入試区分別）

2015年～2017年の体育各部部員の基準単位未達率を「入試区分別」で見ると、2016年および2017年で統計的有意差が見られ、未達率が最も高い区分と最も低い区分ではある程度の差が見られた。

#### 4.1.5 まとめ

今回の体育各部員の学業成績分析の結果をまとめると以下の通りとなる。

(1) 卒業率

2011年～2013年入学年度別の卒業率に統計的有意差は見られなかった。学部別、体育各部別、入試区分別で見ると、統計的有意差のある入学年度が見られ、学部別および体育各部別の最も高い卒業率と最も低い卒業率では大きな差があることが確認された。しかし、いずれの学部、体育各部においても3年間の結果は一定ではないため、特定の学部、体育各部、入試区分の卒業率が高い、または低いといった傾向は見出せなかった。ただし、常に卒業率の低い学部、各部、入試区分が存在するため、それらについては原因分析の検討を進めたい。

(2) 通算 GPA 平均値

2015年～2017年の通算 GPA 平均値を見ると、2015年を基準年とした場合、2016年および2017年は統計的に有意に向上していることが確認された。また、2012年～2015年入学のいずれの学年の平均値も上昇傾向にあることがわかった。本学では、2014年から早稲田アスリートプログラム（WAP）の修学支援の一環として、基準単位達成管理および GPA の高い体育各部部員の褒賞を行っているが、こうした

取り組みが一定の成果を上げていると考えられる。

また、通算 GPA 平均値については、卒業率や基準単位未達率と異なり、上位および下位の学部、体育各部、入試区分が固定化されており、一定の傾向が見られるため、原因分析の検討を進めたい。

### (3) 基準単位未達率

2015 年～2017 年の基準単位未達率を見ると、各年とも大きな差は見られないが、減少傾向にある。これは、WAP による修学支援が一定の効果をあげていると考えられる。学部別、体育各部別、入試区分別に見ると、統計的有意差のある年度において、未達率が最も高い学部、体育各部、入試区分と最も低いものを見ると、大きな差がある。一方、3 年間の結果は一定ではないため、特定の学部、体育各部、入試区分が高い、または、低いといった傾向は見出せなかった。ただし、常に基準単位未達率の低い学部、体育各部、入試区分が存在するため、それらについては原因分析の検討を進めたい。なお、海外留学後、留学先大学の成績処理時間がかかり、本学の単位認定手続きが成績判定に間に合わず、基準単位未達と判定されてしまうケースがある。今後、判定時期や基準等について再検討を行いたい。

### (4) 今後の課題

#### ① クロス集計による詳細傾向の把握

今回は単純集計並びに基礎的なクロス集計を行ったが、例えば体育各部と所属学部等のクロス集計を行うことにより、より詳細な傾向を把握することもできると考えられる。また、住まいと練習場の距離、授業時間と部の練習時間の関係など、あらゆる環境が体育各部員に影響していることが考えられる。これらひとつひとつを分析するとともに、体育各部部員の環境改善や WAP プログラムの新たな施策立案、実行につなげていきたい。

#### ② 卒業率の定義

卒業率については、一般に、大学は 4 年間という標準修業年限で卒業することを前提とし、学生も 4 年間で卒業することが通常である。したがって、4 年間で卒業率を高めることを WAP 修学支援の目標として取り組んでいる。

しかし、本学の学生は、自らの目標を実現するために積極的に留学あるいは休学し活動する学生が少なくない印象があり、必ずしも 4 年間で卒業することを前提としない学生も存在している。実際に、本学では、学生に留学することを強く推奨している

し、大学の中長期計画「Waseda Vision150」では、すべての学生が留学することを目標に掲げている。また、なかには、4年間で卒業が充分可能であるが、志望する企業や業界への就職活動のため、あえて計画的に履修し、5年生となる学生も少なからず存在する。以上のように、学生の行動には、卒業率の値では表れない側面がある。したがって、学生が標準修業年限（4年間）を超えて、目標や夢を実現するために、積極的かつ計画的な活動を実行できている割合を計測する必要があると考える。

### ③ 分析結果の学内共有および WAP のさらなる発展

本分析結果は WAP 委員会等に報告するとともに、体育各部に対して明示的に説明し、より高いレベルでの文武両道を実現に向けて、さらに積極的に取り組むよう働き掛けたい。

## 4.2 早稲田スポーツのブランド化と収益可能性の検討

### 4.2.1 早稲田スポーツブランド力向上につながる情報発信

早稲田スポーツのブランド力向上のためには、まずは効果的な情報発信（体育各部および選手の試合予定、結果等）を行うことで、学生、校友を含む多くのステークホルダーの共感を得ることができる。本学には 44 の体育各部に 2700 名以上の学生アスリートが所属し、また OGOB にもプロ・アマを含め顕著な活躍をしているアスリートが数多くいる。早稲田スポーツのブランド力が向上する土台を構築することを目的に、これらの情報を効果的かつ速やかに発信する取り組みを行った。

#### (1) 競技スポーツセンターでの情報発信について

競技スポーツセンターでは、ウェブサイト、Facebook、Twitter を主な情報発信メディアとして活用しており、それぞれの役割は以下（表 2）の通りである。ホームページの位置づけは、「早稲田スポーツのポータルサイト」であり、競技結果を中心とする体育各部（OBOG 含む）に関するニュース、早稲田アスリートプログラム（WAP）の活動報告、早稲田ウィークリー（早稲田大学学生部が発信する学生向け週刊広報ウェブサイト）等による早稲田スポーツ特集、オリンピック・パラリンピック関連情報を掲載している。記事は、オリジナル記事および他サイトのリンク掲載で構成している。Facebook は主に「関連サイトのリンク拡散」、Twitter は「体育各部 44 部からの情報発信」および関連サイト・関係者のツイートの「リツイートによる情報拡散」を行っている。その他、上記ウェブ広報の他、パネル展示、早稲田スポーツ展、早稲田スポーツ年鑑の発行を行い、多様なメディアによるスポーツ情報の発信を行っている。

メディア	位置づけ・役割	内容	サイトイメージ
1 競技スポーツセンター ウェブサイト	早稲田スポーツの ポータルサイト	1) ニュース 2) 早稲田アスリートプログラム (WAP) の活動報告 3) 早稲田ウィークリー等による早稲田スポーツ特集記事 4) オリンピック・パラリンピック 4) その他リンク	
2 競技スポーツセンター Facebook	早稲田スポーツ ファンクラブ	以下メディア記事のリンク・拡散 1) 早稲田ウィークリー 2) 早稲田スポーツ新聞会	
3 競技スポーツセンター Twitter	早稲田スポーツ 関連ニュースの拡散	1) 体育各部44部 (全部に広報担当を設置) の情報発信 2) 以下組織のツイートのリツイート ①関係競技連盟・協会 ②早稲田スポーツの著名な校友 ③早稲田スポーツ新聞会	
4 競技スポーツセンター Youtube	早稲田スポーツ 関連動画の拡散	体育各部主将による「キャプテンボイス」の公開等	

表 2 早稲田大学競技スポーツセンターの情報メディア

## (2) 競技スポーツセンターを中心とした情報発信

### ① WEB サイトおよび SNS による情報発信

【体育各部および各選手の主たる大会情報の把握・発信】

学内外の早稲田スポーツへの関心を高めるため、競技スポーツセンターでは、体育各部に広報担当者を設置し、積極的に情報発信するように指導しており、各部が試合スケジュール等を発信している。競技スポーツセンターのウェブサイトでは、各部サイトへのリンク掲載により、試合予定・大会情報の発信・拡大に努めた(図 5)。また、Facebook、Twitter で拡散するなど、事前の情報発信に力を入れた。さらに、大会情報のみならず、選手達の素顔やストーリー性のある記事も併せて発信することで、読者の関心を高める工夫を行った(図 6)。



競技スポーツセンターウェブサイト:

「試合予定」



早稲田大学米式蹴球部ウェブサイト 試合日程ページ



早稲田スポーツ新聞会: ラグビー部早慶戦試合結果

図 5 競技スポーツセンターHP での試合日程案内と結果報告



図 6 早稲田ウィークリー：箱根から五輪へ 瀬古から大迫へ

【試合結果・ニュースの発信】

事前情報発信後は、競技結果・ニュースのタイムリーな発信に努めた。2017年度は、ユニバーシアード(8月19～30日)、箱根駅伝(1月2～3日)、平昌オリンピック(2月9～25日)、同パラリンピック(3/9～3/18)、など様々な大型スポーツイベントが続き、それぞれ大きな成果を収めた。ユニバーシアードでのメダル25個の獲得、箱根駅伝3位、ア式蹴球部女子チームの史上2校目のインカレ3連覇、本学校友渡部暁斗選手(2011年スポーツ科学部卒)の平昌オリンピック・ノルディックスキー複合個人ノーマルヒルで銀メダル獲得、ノルディック複合ワールドカップにおける総合優勝、村岡桃佳選手(スポーツ科学部3年)の平昌パラリンピック・アルペンスキー金メダル獲得(1大会5メダル獲得)など、現役学生・校友双方の活躍の情報発信を行った(図7)。

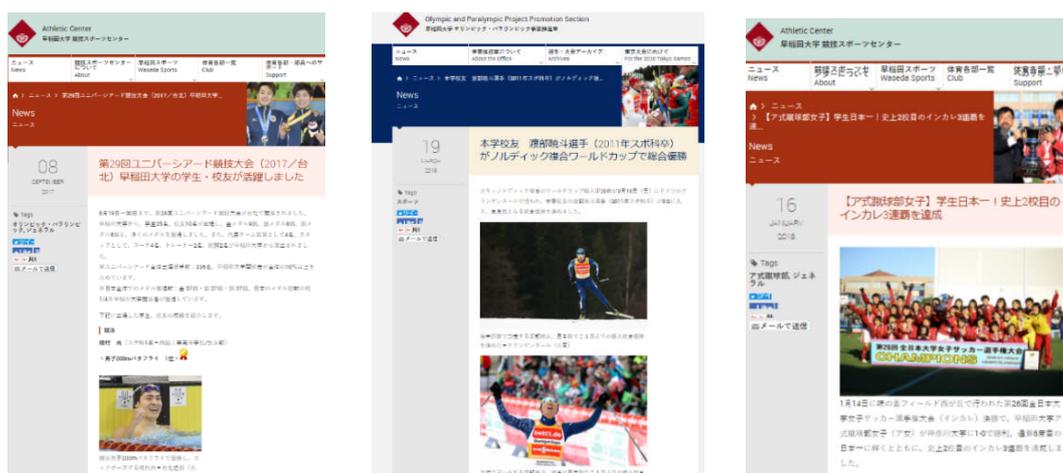


図 7 第29回ユニバーシアード競技大会(左)  
 早稲田大学オリンピック・パラリンピック事業推進室HP: 本学校友渡部暁斗選手(2011年スポ科卒)のノルディック複合ワールドカップにおける総合優勝(中)  
 早稲田大学競技スポーツセンターHP: ア式蹴球部女子 インカレ3連覇(右)

## ② パネル展示

ウェブサイト・SNS 等の情報発信のほか、大隈会館（大学本部棟）での通年パネル展示、およびおよび 27 号館ワセダギャラリーにおいて早稲田スポーツ新聞会との共催で「早稲田スポーツ展」を開催し、卒業生、新入生、また早稲田スポーツファンを対象に、本学アスリートたちの活躍を知っていただく機会を創出した。大隈会館は、校友や学外者も多数訪れるため、早稲田スポーツの発信につながったと考える。

### ➤ 大隈会館でのパネル展示

2017 年 7 月 12 日～：春学期に活躍した早稲田スポーツ（体育各部）の写真を展示

2017 年 8 月 4 日～：世界水泳入賞者の写真を展示

2017 年 11 月 16 日～：早稲田スポーツ新聞会が、早稲田祭で発表した写真を展示

2018 年 1 月 25 日～：平昌オリンピック・パラリンピック出場選手の写真を展示

### ➤ 早稲田スポーツ展

2018 年 3 月 24 日（土）～26 日（月）、2018 年 4 月 1 日（日）～3 日（火）



図 8 「早稲田スポーツ展」(2017 年)

## ③ 早稲田スポーツ年鑑のとりまとめ

早稲田スポーツ(全 44 体育各部)の 1 年間の軌跡をまとめた「早稲田スポーツ年鑑」の発行を行った。2017 年度版は 44 体育各部の活動の他、早稲田アスリートプログラム、平昌オリンピック・パラリンピック等を盛り込む内容で現在編集集中である。

早稲田スポーツ年鑑は、各学部、学内関係箇所、学外関係団体および支援企業・団体等に配付し、早稲田スポーツの認知度向上、普及・PR を目指している。また、外部に対する体育各部および競技スポーツセンターの活動説明時にも活用している。



図 9 早稲田スポーツ年鑑（2016年）

#### ④ まとめ

上述の情報発信による早稲田スポーツの PR 効果の定量的な成果測定は困難であるが、学内関係各所のスポーツへの理解、興味が高まったことで、競技スポーツセンター以外の発信媒体にスポーツ情報が掲載されることが増えたことは一定の成果と言える。

また、競技スポーツセンターウェブサイトの平均アクセス数は 1344/日（2017年4月1日～2018年3月23日）であるが、大きな大会や在学・校友アスリートの活躍など関心の高いテーマについて SNS で情報拡散を行うと、ウェブサイトへのアクセス数が数千に至る（図 10）。このことから、タイミングを踏まえた効果的な情報発信の検討が必要である。その際、競技スポーツセンター単独ではなく、オリンピック・パラリンピック事業推進室、早稲田ウィークリー、早稲田スポーツ新聞会、体育各部等と連携し、「早稲田スポーツの総合的な情報発信戦略」の検討も今後視野に入れたい。さらに、報道の速さは新聞等の既存メディアにかなわないが、大学ならではの情報発信として、「学生アスリート個人に着目したストーリー」による情報価値の向上、ファン獲得を 1 つの方策として「早稲田スポーツのブランド化」を目指したい。



図 10 競技スポーツセンターHP アクセス数

#### 4.2.2 収益力向上につながる可能性の高い具体的対洗出し

本学では総務部において、商標権、著作権、肖像権等の管理を行っているが、体育各部を活用した戦略的なブランド力向上・収益獲得のために必要な諸条件の整備はいまだ、発展途上である。

本事業では、「大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」（後述 4.3.2）で習得した関連知識を活かし、大学スポーツブランディングにおける法務的な問題の解決に関する検討を行う。また、学内外の専門家からのアドバイスや、インプットを通じ、大学スポーツブランディングおよび外部資金獲得に係るスキームの検討を行う。

##### （1）前提条件

当センター職員（大学スポーツ・アドミニストレーター）は、本事業で実施した「大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」および米国フロリダ大学の視察にて資金調達の手法について学んだ。米国フロリダ大学の財政（参考：4.3.3②）を理解した上で、上記育成プログラムにてファイナンスおよび権利ビジネスについて学んだことは非常に有益であり、それが本検討の基盤となっている。

まず、フロリダ大学のスポーツ関連収入源は、アメリカンフットボールという単体競技に由来するという大前提がある。収入の約 7 割はアメリカンフットボールの試合のチケットおよびその関連寄付、約 2 割がロイヤリティや放映料であり、これはおそらく、その他の米国 NCAA メンバー大学のうち、収益的に成功している大学はそれと大差ないと考えられる。すなわち、米国大学のスポーツ収益モデルは、①アメリカンフットボールという多額の収益をあげうるキラーコンテンツ、②大観衆を収容できる競技場、③大学スポーツコンテンツから直接収入を得る仕組み（例：放映権）、の存在を前提条件としている。

この前提条件で当大学の現状を整理すると以下ようになる。

##### 【早稲田スポーツの収益事業検討における前提条件】

- ① 米国におけるアメリカンフットボールほどのキラーコンテンツはないが、一定の集客力が見込めると思われる競技は以下の通り。

- i. 団体競技：野球、ラグビー、競走（駅伝）、サッカー、バスケットボール、バレーボール、アイスホッケー、アメリカンフットボール
  - ii. 個人競技：庭球、水泳、卓球、バドミントン、柔道、ボクシング
  - iii. その他：早慶戦
- ② 大学内に多数の観客席を有する競技場は存在せず、当面建設計画はない。
- ③ 大学が直接収入を得る仕組みが不在
- 収益性の高い競技（六大学野球、ラグビー対抗戦、箱根駅伝等）については、既に他団体が各種権利等を確保していると思われるとともに、全44部が各競技連盟に所属し、公式戦の主体は各競技連盟であることから、大会入場料等の大学への資金の流れが大きくない。

## (2) 収益獲得（案）

上記、前提条件を踏まえ、本学で外部資金調達の可能性のある対象およびその実施に向けた課題を下表の通り整理した。フロリダ大学のような収益モデルは本学には導入できないが、集客力のある競技の試合のチケット収入を始め、広告、コンテンツ、寄付、権利ビジネスからの収益創出の可能性を探りたい。

外部資金調達項目		性格	資金源
1 広告掲載			
①	練習施設	対価	学外
②	ユニフォーム	対価	学外
③	チームウェブサイト	対価	学外
2 チケット関連			
①	集客力のある競技の試合のチケット販売	対価	学外
3 コンテンツ			
①	各種競技大会のオリジナルコンテンツのWEB発信 (寄付者のみ限定公開など限定発信)	対価	学内/学外
4 寄付			
①	教育・大学スポーツ事業支援・振興への理解による寄付	支援/対価	学外
②	スポーツ寄付金制度の創設	支援/対価	学外
③	イベント実施等におけるクラウドファンディング	支援/対価	学内/学外
5 権利ビジネス			
①	ライセンスビジネス	対価	学外
②	商標登録（各競技連盟との権利関係の整理の上）	対価	学外
③	肖像権管理	対価	学外
④	テレビ放映権（中継）	対価	学外

表 3 外部資金調達項目（案）一覧

### (3) 課題

収益獲得（案）の実現に向けた課題としては、下表の通り外部主体との様々な調整や交渉が必要となる。また、大学スポーツ行政全体に関連する課題として、一般学生からの納付金の競技スポーツへの予算投入に対する説明責任、また、大学が収入を獲得することへの世間一般からの批判に対する説得力のある説明が必要である。今後、フィージビリティや各取り組みの収益性などを踏まえ、検討を進めていく予定である。

1. および3. 広告掲載/コンテンツ
①大学全体でのブランド管理、広告掲載の方針との整合性 ②継続かつ横断的な広告獲得（内容、場所、時期等による明確な単価基準の設定）
2. チケット関連
① 競技連盟との調整等
4. 寄付
①潜在的寄付者のニーズの把握 ②潜在的寄付者への情報伝達手法の確立 ③寄付金調達のための学内体制の構築
5. 権利ビジネス
(1) ライセンスビジネス ①大学全体のブランド戦略、外部資金獲得政策としての大学スポーツの活用 ②内部ルールの地道な対外普及 (2) 商標登録：無断使用をしている個人・団体等への粘り強い説明。 (3) 肖像権管理 入学前から個人的なスポンサー等がついている場合の扱い（日本では競技連盟ごとに扱いが異なる） (4) テレビ放映権 大学がビジネスと考える場合の権利関係の整理

表 4 収益獲得（案）に関する課題

#### 4.2.3 早慶戦シリーズ（仮称）の実現に向けた検証

早慶戦は、1903年の野球の試合を皮切りとした日本を代表する大学スポーツの対抗戦である。2018年3月現在、全44体育各部中、野球部、漕艇部、ラグビー蹴球部、ア式蹴球（サッカー）部ほか計39部が早慶戦を実施している。野球やラグビーにおいては30,000人以上の観客を集めることもあり、各種メディアによる放映、グッズ販売等、スポーツ・ビジネスの観点からも多大なポテンシャルがあると言える。こうしたポテンシャルに着目し、「早慶戦シリーズ（仮称）」の開催による「早慶戦のブランド強化」および事業性の検証を行うこととした。

具体的には、早慶戦は現在、競技によって異なる時期に実施しているが、各競技の開催時期・場所・その他条件を整理し、可能な限り上記主要競技の日程に合わせて複数競

技を集中させたり、早慶戦キャンペーンを行って「早慶戦シリーズ（仮称）」を開催することで、スポーツ観戦の楽しさを増すとともに、学生・校友の愛校心の醸成、早稲田ファンの獲得はもとより、「早慶戦のブランド強化」を図るとともに、競技開催地域との連携により地域貢献・地域活性化を目指す。構想検討にあたっては、種目の勝敗数で総合勝敗を決定するなど独自の取組を進める韓国「高延戦」等を参考にした。

#### （１） 早慶戦シリーズの検討

##### １） 早慶戦の実施状況の整理

各競技の早慶戦の現状把握として、全 44 体育各部の早慶戦実施状況（開催日、勝敗、開催形式）を把握した（表 5）。また、これをもとに、毎月の早慶戦の開催種目および各競技の開催場所について整理を行った（表 6、表 7）。

開催時期については、1 月～12 月まで 2 月および 3 月を除いた 10 ヶ月間に 39 競技の早慶戦が開催されており、11 月（11 競技）に集中している。5 月、10 月は野球、11 月はラグビーと集客力のある（30,000 人～40,000 人程度）競技が開催されている。

開催場所については、東京都区内（23 区内）、東京郊外（東京 23 区外等）、近郊と分散しており、東京郊外が最も多くなっている。東京都区内では、野球、ラグビー、バスケットボール、漕艇など集客力の高い競技を含む競技が、明治神宮野球場や秩父宮ラグビー競技場、国立代々木競技場第二体育館など、都内主要スポーツ施設を中心に開催されている。東京郊外では、テニス、バレーボール、アイスホッケー、ラクロス、馬術などの種目が、早稲田大学（東伏見キャンパス、所沢キャンパス）および慶應義塾大学（日吉キャンパス）の施設を中心に開催されている。東京近郊では、ヨット、ゴルフ、自動車など、都内では得られない環境（海や広い敷地等）を必要とする競技が開催されている。

開催形式に目を向けると、これら 39 の早慶戦は、多くは単独定期戦として開催されており主催は早慶両校となっているが、野球は東京六大学野球リーグ戦、準硬式野球は東京六大学準硬式野球リーグ戦、ラグビーは関東大学ラグビー対抗戦の一部という位置づけであり、主催者が大学ではなく競技連盟・協会となっている。

早慶戦というライバル大学の対決は、勝敗を超えた対抗戦としての大きな価値があると考えられており、各部において非常に重要な試合として位置付けられている。

部番	部名	早慶戦勝敗			早慶戦開催日	備考
		部	男子部門	女子部門		
1	野球部	●	—	—	春：5/27-29 秋：10/28-30	六大学リーグ戦
2	庭球部	—	○	○	春：5/13-14 秋：9/13-14	単独定期戦
3	漕艇部	—	○	○	4/16	単独定期戦
4	剣道部	—	●	○	男子：10/9 女子：10/15	単独定期戦
5	柔道部	—	○	○	11/18	単独定期戦
6	弓道部	—	●	○	5/14	単独定期戦
7	水泳部	—	競泳○	水球○	7/2	単独定期戦
8	競走部	●	—	—	9/17	単独定期戦
9	相撲部	—	—	—	【早慶戦なし】	
10	ラグビー蹴球部	○	—	—	11/23	関東大学対抗戦
11	山岳部	—	—	—	【早慶戦なし】	
12	スキー部	—	—	—	【早慶戦なし】	
13	スケート部	—	アイスホッケー○	—	5/13 1/13	単独定期戦
14	バスケットボール部	—	○	○	6/24	単独定期戦
15	ア式蹴球部	—	○	○	7/15	単独定期戦
16	馬術部	●	—	—	11/17-19	単独定期戦
17	卓球部	—	○	○	6/25	単独定期戦
18	ボクシング部	●	—	—	12/2	単独定期戦
19	体操部	○	—	—	9/3	単独定期戦
20	空手部	●	—	—	11/20	単独定期戦
21	バレーボール部	—	○	○	6/11	単独定期戦
22	レスリング部	○	—	—	12/2	単独定期戦
23	自動車部	●	—	—	12/2	単独定期戦
24	米式蹴球部	○	—	—	4/29	単独定期戦
25	ヨット部	●	—	—	7/8-9	単独定期戦
26	ハンドボール部	—	○	○	11/18	単独定期戦
27	ホッケー部	—	○	○	11/5	単独定期戦
28	フェンシング部	—	○	○	12/3	単独定期戦
29	応援部	☆	—	—	【早慶戦なし】	
30	軟式庭球部	—	○	○	春：6/24 秋：11/26	単独定期戦
31	準硬式野球部	○	—	—	春：5/27-28 秋：9/3-4	六大学リーグ戦
32	自転車部	○	—	—	10/29	単独定期戦
33	バドミントン部	—	○	○	10/28	単独定期戦
34	航空部	—	—	—	前年度の勝敗⇒前年度実施なし	単独定期戦
35	ワンダーフォーゲル部	—	—	—	【早慶戦なし】	
36	ゴルフ部	—	●	○	8/14	単独定期戦
37	ウエイトリフティング部	○	—	—	9/30	単独定期戦
38	射撃部	○	—	—	11/26	単独定期戦
39	合気道部	○	—	—	10/8	単独定期戦
40	アーチェリー部	—	●	○	11/5	単独定期戦
41	ソフトボール部	—	○	○	11/18	単独定期戦
42	日本拳法部	○	—	—	11/26	単独定期戦
43	ラクロス部	—	△	●	5/21	単独定期戦
44	少林寺拳法部	●	—	—	12/17	単独定期戦

○は勝利、●は負け、▲は引き分け。月日は早慶戦開催日。

☆応援部は、早慶戦で応戦活動を実施。

表 5 2017 年度早慶戦 開催結果

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アイスホッケー (男子)			漕艇	野球(春)	バスケ (男子)(女子)	水泳 (男子)(女子)	ゴルフ (男子)(女子)	庭球(秋) (男子)(女子)	野球(秋)	ラグビー蹴球	レスリング
			米式蹴球部	庭球(春) (男子)(女子)	卓球 (男子)(女子)	ア式蹴球 (男子)(女子)		体操	剣道 (男子)(女子)	柔道	ボクシング
				弓道	バレーボール (男子)(女子)	ヨット		競走	合気道	馬術	フェンシング (男子)(女子)
				アイスホッケー (男子)	軟式庭球(春) (男子)(女子)			準硬式野球部 (秋)	自転車	ホッケー (男子)(女子)	自動車
				準硬式野球部 (春)				ウエイト リフティング	バドミントン (男子)(女子)	空手	少林寺拳法
				ラクロス (男子)(女子)						射撃	
										ハンドボール (男子)(女子)	
										日本拳法	
										アーチェリー (男子)(女子)	
										軟式庭球(秋) (男子)(女子)	
										ソフトボール (男子)(女子)	

表 6 月別早慶戦開催種目(2017年度)

	東京都区内(23区)	東京郊外(東京23区外等)	東京近郊
競技	野球、ラグビー、バスケットボール、漕艇、水泳、弓道等	テニス、ソフトテニス、サッカー、アイスホッケー、バドミントン、ラクロス、バレーボール、弓術、競走、器械体操、馬術等	ヨット、射撃、軟式野球、テニス、自転車、ゴルフ、自動車等
施設	明治神宮野球場	早稲田大学所沢キャンパステニスコート	葉山港(神奈川県)
	秩父宮ラグビー場	早稲田大学東伏見グラウンド	ドライビングパレット那須(栃木県)
	国立代々木競技場第二体育館	早稲田大学馬場	千葉方ジトリニテラブリ川間ゴニス(千葉県)
	隅田川	早稲田大学弓道場	伊勢原射場(神奈川県)
	中央区立総合スポーツセンター	早稲田大学三神テニスコート	境川自転車競技場(山梨県)
	東京辰巳国際水泳場	慶應義塾大学スポーツ棟地下1階	
	駒沢オリンピック公園総合運動場第一競技場	慶應義塾大学日吉記念館	
	等々力陸上競技場	慶應義塾大学日吉陸上競技場	
	早稲田大学17号館地下2階レスリング場・ウェイトリフティング場、2階剣道場、地下1階空手道場	慶應義塾大学日吉柔道場	
		慶應義塾大学高等学校地下体育館	
		慶應義塾大学蝮谷体育館	
		慶應義塾大学正己弓道場	
	慶應義塾大学講道館		
	ダイドードリンコアイスアリーナ		
	新横浜スケートセンター		

表 7 主な早慶戦開催場所

## 2) 高延戦の視察

「早慶戦シリーズ（仮称）」の開催検討にあたり、以下の通り、高麗大学と延世大学の定期交流戦（高延戦）の視察を行った。また、合わせて高麗大学体育委員会を訪問し、定期交流戦に関するヒアリングを行った。

### ① 視察概要

<b>目的</b>	高麗大学と延世大学（高延戦）の定期交流戦を視察し、早慶戦シリーズ立案の参考とする。また、高麗大学体育委員会を訪問し、ヒアリング、意見交換を行う。
<b>日程</b>	2017年9月21日（木）～23日（土）
<b>参加者</b>	競技スポーツセンター：岩井所長、石井副所長、鈴木、一橋、佐藤、寺岡（6名） （株）早稲田大学アカデミックソリューション：高木、伊東（2名）
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●9月21日（木） 14:00 高麗大学体育委員会訪問・ヒアリング・施設見学</li> <li>●9月22日（金）：<u>高麗大学・延世大学定期交流戦視察</u> 10:00 開会式【Jamsil Baseball Stadium】25 Olympic-Ro, Songpa-gu 11:00 野球【同上】 15:00 バスケットボール【Jamsil Gymnasium】 17:00 アイスホッケー【Mok-Dong Ice-Rink】</li> <li>●9月23日（土）：<u>高麗大学・延世大学定期交流戦視察</u> 11:00 ラグビー【Mok-Dong Gymnasium】 14:00 サッカー【同上】</li> </ul>



野球会場にて定期戦全体の開会式



野球観戦（観客2万人程度）



バスケットボール応援風景



アイスホッケーの試合



ラグビー、サッカー試合会場



OB 会による応援グッズ無料販売



袋を使った応援（袋は使用后ゴミ袋に）



応援団による応援



OBOG 席



応援団と OBOG による円陣



翌日の高延戦を応援する  
地域商店街の横断幕



高麗大学体育委員会へのヒアリング

## ② 高延戦と早慶戦の比較

高延戦は、1925年5月30日に行われたテニスの試合が始まりであり、1945年にサッカー、バスケットボールの対抗戦が開始し、1965年に現在の全5種目の対抗戦となったという歴史がある。高麗大学と延世大学という韓国の二大名門校の対抗戦である高延戦は、韓国人の歴史あるスポーツ文化、プライドに根差したものであり、スポーツを通じて各大学の教育、違いを見せる場でもあり、こうした背景や文化は、早慶戦のそれと類似している。

一方、今回の高延戦、高麗大学の視察調査（見学、ヒアリング）より、対抗戦の位置づけ、開催方式・運営、応援スタイル、競技種目、地域とのかかわり等、様々な相違点も浮き彫りとなった（詳細は「参考資料」参照）。

大きな違いとしては、高延戦は「大学行事」として位置づけられており、それ故大学の多額の資金が投入されていることである（主催は両校による隔年の持ち回り）。なお、早慶戦は、体育各部または競技団体（連盟・協会）が主催する行事であるため、原則として、大学からの支援はない。

また、高延戦は大学行事である故、学生やOBOGが応援に駆け付け、応援団とともに盛大な応援合戦が繰り広げられる点が挙げられる。応援は、隣の人とも会話が出来ない程のボリュームで歌や踊りなどが試合中常時展開されており、応援団も派手な衣装をまとってパフォーマンスを行うなど、校歌斉唱や試合前後のエール交換が厳かに行われる早慶戦のそれとは対照的である。また、OBOGにとっては、スポーツを通じたホームカミングデーのような意味合いもあり、イベント性が高い点が特徴である。さらに、開催会場付近では、商店街をあげて横断幕を張って応援ムードを醸成するとともに、2日目の試合終了後は関係者が、大学キャンパス付近の飲食店を借り切って祝賀会をするなど、地域と一体となってイベントが展開されている点も特徴的である。

最後になるが、高麗大学体育委員会に所属している部は、野球部、バスケットボール部、アイスホッケー部、ラグビー部、サッカー部の5部だけであり、いずれも男子チームのみである。したがって、全5競技の対抗戦を大学外部の大規模スポーツ施設にて定期的（毎年9月第三金・土曜日の2日間）に実施することができる。早慶戦は、ほぼ1年間にわたり計39競技の対抗戦を主に早慶両校のキャンパス内施設で展開しており、大きな違いである。主要人気スポーツを2日間に集中して、大学外部大規模施設で実施することは、集客やイベント性を高める手法としても参考になる点である。

項目	高延戦	早慶戦
位置づけ	大学の一大イベント	体育各部のイベント
開催費用	大学支出	原則、大学からの支出なし
開催時期	毎年9月第三金・土曜日	1年を通じて種目別に開催
開催会場	大学外部の大規模スポーツ施設で開催	野球、ラグビー等を除き、早慶キャンパス内施設で開催
入場料	なし	一部の種目で徴収
競技種目	野球、バスケットボール、アイスホッケー、ラグビー、サッカーの5種目	野球、バスケットボール、アイスホッケー、ラグビー、サッカーを含む39種目
観客数	ラグビー、サッカーは2万人	野球は3-4万人、ラグビーは2万人
応援	大音量の音楽と踊りのライブイベントのような応援	応援部を中心とした組織的な応援
地域連携	試合開催期間前から商店街ぐるみで応援（試合後、店を借り切って祝賀会）	会場所在地域との連携は特になし（野球部が優勝の際は、明治神宮野球場から大学まで優勝パレードを行う）

表 8 高延戦と早慶戦の比較

### 3) 早慶戦シリーズ（仮称）の検討

早慶戦の実施状況の把握、および高延戦視察を踏まえ、「早慶戦シリーズ（仮称）」の検討を行った。その結果、現行の全39種目の短期間集中実施は困難であるが、競技を野球やラグビーなど多くの集客が見込めるものに絞り、例えば、新国立競技場、明治神宮球場、秩父宮ラグビー場、国立代々木競技場第二体育館など施設の集中したエリアで実施する可能性が考えられ、学生・校友のみならず社会に対するインパクトは非常に大きなものになる可能性があるとの結論に至った。また、短期間集中でなく異なる時期に実施をした場合でも、その勝敗で総合優勝を決めるなどは早慶戦を盛り上げる一つの手段となり得るのではないかという議論があった。

なお、実施競技を絞り、両大学の既存施設を利用して集中的に開催するという実施体制であれば、大規模に実施するよりもハードルは低くなることが予想される。

その他、応援については高延戦を参考に、大学の応援カラーの統一や写真撮影スポットの提供など、参加者に一体感をもたらす手法や楽しませる数々の工夫、公式ウェブサイトの創設による情報発信、高延戦との連携や日韓観戦ツアーの造成など、早慶戦のブランド化・収益化の可能性について整理した。

対抗戦のスタイル		
1	全39競技による「早慶戦シリーズ」	<b>39部全ての早慶戦を高延戦のように短い期間に競技を集中して実施することは、不可能に近い。</b> 週末に連盟等のリーグ戦などが隙間なく組まれていることや、各部のこれまでの慣習の中で決められた実施時期があること等を踏まえると、実現可能性が低い。
2	競技数を絞った「早慶戦シリーズ」	<b>「高延戦」のように5競技等に絞れば不可能ではない。</b> ・野球、ラグビーのような多くの集客が見込めるスポーツが候補となるか。 ・実施時期はバラバラでもその勝敗で総合優勝を決めることは、早慶戦を盛り上げる1つの要素になり得る。 ・ラグビーとサッカーを同日午前、午後で実施するのは面白い。
応援		
1	応援方法の工夫	高延戦のビニール袋応援、写真撮影スポット、原則としてエンジ色の服で応援するスタイルなどはすぐに参考にできる。
2	OBOGのこれまで以上の巻き込み	早慶戦もこれまで以上に一般学生、OB・OGを巻き込むことで、早慶戦のさらなる盛り上げを期待できる。
情報発信		
1	情報発信の工夫・充実	<b>公式WEBサイトの創設</b> 早慶戦の予定、結果、歴史、魅力を発信するポータルサイトの設置は効果的である。ただし、教職員と部員、早稲田スポーツ新聞会との連携などが必要となる。
「高延戦」との連携		
1	日韓連携（早慶、高延のミックス）	<b>高延戦と早慶戦の連携</b> 困基等で実績もあり、検討しても良いのではないかと。 (例1) 高麗・早稲田VS延世・慶應・・・サッカーで実績あり (例2) 早稲田・慶應VS高麗・延世・・・高麗・延世チームは可能か。
2	観戦ツアーの造成	<b>日本からの高延戦の観戦、韓国からの早慶戦観戦ツアーの造成</b> 高延戦、早慶戦を対比して見ることは、関係者に限らず、一般学生、一般の方にとっても興味深いものではないかと。

表 9 早慶戦シリーズ（仮称）の検討

#### 4) 慶應義塾大学体育会へのヒアリング

「早慶戦シリーズ（仮称）」の開催の可能性について検討するため、平成30年3月14日（水）に慶應義塾大学体育会へのヒアリングを行った。その結果、公式戦日程、場所、部の選定、OBOG会への協力依頼など調整すべきことは多いが、それらが上手くできれば、実施の可能性があるという結論に至った。また、開催場所を両大学の既存施設をうまく活用できるなら、外部と場所の調整が少なく済むとともに、学生も参加しやすいであろう、という検討を行った。

## 5) まとめ

今回の「早慶戦シリーズ（仮称）」の実現に向けた検証を行うにあたり、全ての体育各部の早慶戦実施状況の把握およびイメージづくりを進め、慶應義塾大学へのヒアリングにより将来的な実現の可能性についての協議の第一歩を踏み出すことが出来た。

今後、慶應義塾大学との継続的な協議、早稲田大学体育各部や OGO B 会を含む関係各所へのヒアリング等により数種目の短期間での集中実施の可能性（体育各部のスケジュール、連盟との関係、場所の確保等）、運営体制（資金、実施体制等）等を整理する必要がある。今年度は、時間的制約もあり、十分な実現性の検証には至らず、また、会場規模の問題等もあり、早慶戦単体による収益の確保は困難であるが、早慶戦シリーズという事業インパクトを効果的にアピールすることにより、寄付を含めた卒業生からの支援や、その他の事業との連携による収益確保の可能性はある。今年度とりまとめた内容をもとに検討を進めたい。

## 4.3 大学スポーツ・アドミニストレーターの育成と活用

本学では、先進的モデル事業の3つ目として、「大学スポーツ・アドミニストレーターの育成と活用」を実施した。具体的には、本事業で求められる「大学スポーツ・アドミニストレーターの配置・実務従事」の傍ら、「大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」の開発・実施・検証、および「海外トップ大学の視察」を行い、今後の早稲田スポーツの更なる発展に向け、当センターで育成を目指すべき「大学スポーツ・アドミニストレーター」の役割、必要なスキル、マインド等を把握・検討するとともに、新取り組み組み提案を行うことを目的に実施した。

### 4.3.1 大学スポーツ・アドミニストレーターの配置

前述の通り、競技スポーツセンターには1名の所長、3名の副所長、6名の専従スタッフがいるが、本委託事業にて、将来の日本の大学スポーツを担う若手2名を「大学スポーツ・アドミニストレーター」として以下の通り新規に雇用した。

項目	内容
雇用期間	2017年12月18日～2018年3月30日
従事業務	(1) 本事業関連
	①大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム
	【実施内容】各講座への参加、議論、まとめ
	【成果】講座受講結果を議論し、早稲田大学における活用可能性について検討
	②フロリダ大学・MGアカデミー視察調査
	【実施内容】事前準備（情報収集）、訪問/ヒアリング、視察内容まとめ
	【成果】先進的事例を効果的に学び、かつ、早稲田大学に活用させるための各業務を実施
	(2) 早稲田スポーツ発展に寄与する各種施策実行への貢献
【実施内容】全44の体育各部データの基本情報（主たる公式戦、就職先、出身高校等）の整備	
【成果】今後の活用方法について検討する準備を行った。	

表 10 大学スポーツ・アドミニストレーターの新規雇用状況

#### 4.3.2 早稲田大学「大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」の開発・実施・検証

競技スポーツセンターでは、早稲田大学スポーツ科学学術院との連携により「早稲田大学大学スポーツ・アドミニストレーター育成プログラム」を開発し、現在の競技スポーツセンター職員（6名）、および新たに配置した大学スポーツ・アドミニストレーター（2名）の計8名が受講することにより、競技スポーツセンター職員のスポーツ・マネジメント・リテラシーの底上げ、および大学スポーツ・アドミニストレーターの育成を行った。

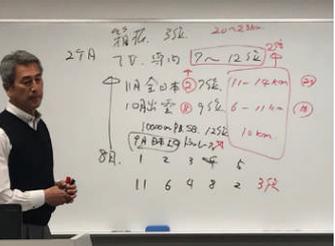
なお、当プログラムは、「早稲田大学が目指す大学スポーツ・アドミニストレーター像」を「学業と競技双方の卓越性の実現に必要な知識と、大学スポーツの推進に必要な経営能力を有する者」と定義し<sup>4</sup>、そのような人材育成の為、「A 大学スポーツとそれを取り巻く環境」（4講義）、「B 大学スポーツの健康安全と競技力の向上」（3講義）、「C 大学スポーツ・マネジメント」（5講義）の3つのテーマを柱にカリキュラム開発を行った（詳細は下表参照）。

本プログラムの各回の基本構成は、講義形式60分、ワーク形式60分で、講義については「各テーマの一般的知識の取得」、ワークについては、基本的には「早稲田大学固有の課題、早稲田大学で取り組むべき事項」について議論を行い、今後の検討、取

<sup>4</sup> 「大学スポーツ・アドミニストレーター像」は、「スポーツ分野でも同様に、教育、研究、課外活動および社会貢献を含め学内のスポーツ活動に一定の知識・経験を有しつつ、大学スポーツの事業開拓とブランド力の向上を推進する能力を有する者」（大学スポーツの振興に関する検討会議 最終とりまとめ～大学のスポーツの価値の向上に向けて～平成29年3月 文部科学省）を参照した。

り組み事項に反映することを目的に実施した。

A 大学スポーツとそれを取り巻く環境	第1回 大学スポーツの歴史・意義と大学スポーツ・アドミニストレーターの役割	
	【日時】平成29年11月22日(水) 15:00-17:00 【場所】33号館 332教室 【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 石井昌幸 教授	
	【講義概要】日本における近代スポーツおよび早稲田大学スポーツの歴史と意義について、大隈重信、安部磯雄、飛田穂洲の主に戦前までの思想を中心に学んだ。ワークでは、「スポーツとは何か」、「早稲田スポーツとは何か」、「体育各部の必要性」、「大学SAやWAPの役割」について議論を行った。	
	第2回 中学・高校運動部活動の基礎的情報	
	【日時】平成29年11月29日(水) 15:00-17:00 【場所】33号館 332教室 【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 中澤篤史 准教授	
	【講義概要】中高部活動の国際比較、日本の部活動の歴史的背景、法制度、重要課題について学んだ。ワークでは、「中高部活動と大学部活動の共通・相違点/連続性・断続性」、「部活動指導の外部化と資金」、「育成すべき人材像」等について議論を行った。	
	第3回 大学スポーツ組織論	
	【日時】平成29年12月6日(水) 15:00-17:00 【場所】33号館 332教室 【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 作野誠一 教授	
【講義概要】大学スポーツを取り巻く環境の変化、大学スポーツ組織の多様性とその目的、早稲田スポーツの人材マネジメント、早稲田スポーツのプロデュース組織、大学スポーツの振興・推進組織について学んだ。ワークでは、「体育各部の在り方」、「施設管理」、「WAP」等について議論を行った。		
第4回 大学スポーツのコンプライアンス		
【日時】平成29年12月13日(水) 10:00-12:00 【場所】33号館 431教室 【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 松本泰介 准教授		

	<p>【講義概要】3つのケースワーク（暴力、施設の一部瑕疵によるケガ、大学教員が原因によるケガ）を行った後、「学生スポーツをめぐる不祥事の類型」、「スポーツ界・選手・指導者など関係者における主な不祥事」について学ぶとともに、早稲田大学におけるコンプライアンス組織・教育の方向性について検討した。</p>	
<p>B 大学スポーツの健康安全と競技力の向上</p>	<p>第5回 大学スポーツと安全管理</p>	
	<p>【日時】平成29年12月20日（水）16:00-18:00 【場所】33号館 332教室</p>	
	<p>【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 広瀬統一 教授</p>	
	<p>【講義概要】大学スポーツにおける安全・健康管理と、大学スポーツ・アドミニストレーターとしての役割について学んだ。また、スポーツ科学学術院教員が関わる「スポーツ医科学クリニック」と競技スポーツセンターとの連携方法について議論を行った。</p>	
<p>B 大学スポーツの健康安全と競技力の向上</p>	<p>第6回 スポーツ科学と競技力の向上</p>	
	<p>【日時】平成30年1月17日（水）15:30-17:30 【場所】33号館 332教室</p>	
	<p>【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 磯繁雄 教授</p>	
	<p>【講義概要】何が最大の走りをもたらすのか、という走りの科学（最大速度付近での力曲線・動作、速度=ピッチ（回転数）×歩幅（ストライド）、主観的努力とタイムの関係等）について学んだ。また、早稲田スポーツの競技力強化のための環境づくりについて議論を行った。</p>	
<p>C 大学スポーツ・マネジメント</p>	<p>第7回 大学スポーツのファイナンスとアカウンティング</p>	
	<p>【日時】平成30年1月24日（水）10:00-12:00 【場所】33号館 431教室</p>	
	<p>【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 武藤泰明 教授</p>	
	<p>【講義概要】日本の大学スポーツのファイナンスは、資金の出所（学内・学外）と性格（支援・対価）で考えることができ、大学として出来る資金調達の手法を学ぶとともに、非営利組織の最大の課題は透明性のあるアカウンティングであり、体育各部の会計改善がファイナンスにつながることを学んだ。</p>	
<p>C 大学スポーツ・マネジメント</p>	<p>第8回 大学スポーツと資金調達-スポンサーの獲得-</p>	
	<p>【日時】平成30年1月29日（月）14:00-16:00 【場所】33号館 331教室</p>	

	<p>【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 松岡宏高 教授</p> <p>【講義概要】スポーツ・スポンサーシップについて、日本におけるスポーツ・スポンサーシップの特徴、一業種一社の原則、アンブッシュマーケティング、について学んだ。ワークでは、早稲田大学競技スポーツセンターのスポンサー獲得計画案の作成を行った。</p> 
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">B 大学スポーツの健康安全と競技力の向上</p>	<p>第9回 大学スポーツと健康管理</p> <p>【日時】平成30年2月6日(火) 15:00-17:00 【場所】33号館 332教室</p> <p>【講師】すなおクリニック 内田直 院長 / 早稲田大学名誉教授</p> <p>【講義概要】アスリートの精神科臨床、うつ病、オーバートレーニング症候群、ケーススタディについて学んだ。ワークでは、オーバートレーニングの指標、(学業のプレッシャーともなり得る) WAPの是非、学内における精神科医の設置・外部精神科医との連携、について議論を行った。</p> 
	<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">C 大学スポーツ・マネジメント</p>
<p>第11回 大学スポーツと広報PR～メディアの仕組みから戦略PRを身につける～</p> <p>【日時】平成30年2月27日(火) 15:00-17:00 【場所】33号館 332教室</p> <p>【講師】株式会社サニーサイドアップ 福岡久俊 氏 (PRプロデューサー)</p>	
<p>【講義概要】戦略PRとは“ニュースの伝わり方”を考えることが基本であり、ニュースバリューを持つ企業や団体の広報資源は、新聞、テレビなどのオールドメディアからインターネット、SNS・地域社会に伝達されること、また、「ストーリーと画」がニュースバリューを決めることを学んだ。ワークでは、新聞、週刊誌、スポーツ紙等の設定で、平昌オリンピックの写真にタイトル付けを行った。</p> 	

C 大学スポーツ・マネジメント	第 12 回 大学スポーツと権利ビジネス
	【日時】平成 30 年 2 月 28 日 (水) 10:00-12:00 【場所】33 号館 332 教室 【講師】早稲田大学スポーツ科学学術院 松本泰介 准教授
	【講義概要】2つのケースワーク (①OB 会によるロゴ使用やグッズ販売を行うファンクラブの立ち上げについて、②オリンピックで早大生が金メダルを獲得した事実を本学 HP に掲載したことはオリンピック憲章 Rule40 に違反するか) を行った。その後、スポーツビジネスにおける「契約」と「業界内ルール」について学んだ。



#### 4.3.3 海外視察の実施

早稲田大学競技スポーツセンターおよび大学スポーツ・アドミニストレーターとしての役割を担う職員のあるべき姿、役割、必要なスキル、マインド等を学ぶことを目的に、米国

NCAA の DivisionI で成功を取めているフロリダ大学 (フロリダ州ゲインズビル市)、および IMG アカデミー (同州ブレイデントン市) を訪問し、トップレベルの環境並びに文武両道を目指したジュニア指導の現場を見学した。

##### (1) 視察概要

<b>目的</b>	フロリダ大学の UAA (University Athletic Association) および IMG アカデミーの視察調査により、アメリカの大学スポーツ行政の仕組み、大学スポーツ・アドミニストレーターの役割、スキル、マインド等を学ぶ。
<b>日程</b>	2018 年 1 月 7 日 (日) ~14 日 (日)
<b>参加者</b>	競技スポーツセンター：岩井所長、石井副所長、鈴木、佐藤、寺岡、高嶋、星野 (7 名) (株) 早稲田大学アカデミックソリューション：伊東、桑原 (2 名)

<b>日程</b>	<p>【フロリダ大学】</p> <p>※各テーマ（セクション）につき、フロリダ大学担当から職務概要説明後、質疑応答を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 1月8日（月）：<u>フロリダ大学 UAA ヒアリング</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>9:00 歓迎（UAA ディレクター等）</li> <li>9:30 コンプライアンス</li> <li>10:30 ゲータービジョン（ビデオコンテンツ、デジタルアーカイブ作成部署）</li> <li>11:30 アドミニストレーションとリーダーシップ</li> <li>13:30 UAA ガバナンス</li> <li>14:30-16:30 キャンパスツアー</li> </ul> </li> <li>● 1月9日（火）：<u>フロリダ大学 UAA ヒアリング</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>9:00 施設見学①（アメフトスタジアム、バスケットボールコート他）</li> <li>11:00 スポーツヘルス/ストレングス&amp;コンディショニング/栄養</li> <li>13:00 ライセンシング</li> <li>14:00 コミュニケーション</li> <li>15:00-17:00 施設見学②（ゴルフ場、テニスコート、ラクロス競技場他）</li> </ul> </li> <li>● 1月10日（水）：<u>フロリダ大学 UAA ヒアリング</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>9:00 マーケティング/マルチメディア</li> <li>10:00 アカデミック&amp;ライフスキルサービス（学業・生活技能支援）</li> <li>11:00 ホーキンスセンター視察（学業支援センター）</li> <li>13:00 ゲーターブスター（フロリダ大学スポーツに特化した資金調達組織）</li> <li>15:00 施設計画とマネジメント</li> <li>19:00 男子バスケットボール観戦（フロリダ大学 vs ミシシッピ州立大学 於：Exatech Arena at Stephen C.O'Connell Center）</li> </ul> </li> <li>● 1月11日（木）【移動】 ゲインズビル→ブレイデントン 【IMG アカデミー】 ※IMG アカデミー日本リクルート担当の田丸氏より施設案内を頂くとともに、意見交換を行った。</li> <li>● 1月12日（金）：<u>IMG 見学・意見交換</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>9:00～13:30 IMG アカデミー施設および学及意見交換</li> </ul> </li> </ul>
-----------	--

## （2）フロリダ大学視察

### ① フロリダ大学について

フロリダ大学は、1853年に創立されたフロリダ州で最古・最大規模（アメリカ合衆国では3番目の大きさ）の州立大学であり、早稲田大学とほぼ同規模の50,000人の学生を抱える大学である。同大学は、学問の分野では、2014年ノーベル物理学賞を受

賞した中村修二氏を含むノーベル賞受賞者を数多く輩出しているとともに、スポーツでは、NCAADivision I および Southeastern Conference (SEC) に所属し、歴史的にも数々の NCAA チャンピオンの座に輝いている。例えば、近年では野球、男子陸上、女子テニス、ソフトボール、アメフト、男子バスケなどにおいて NCAA チャンピオンとなり、特に 2006 年にはアメフトと男子バスケという二大人気スポーツの同年チャンピオンシップ取得という全米史上初の快挙も成し遂げている。また、同大学は、過去 9 年間連続全米トップ 5、34 年間連続トップ 10 にランキングされており、文字通り文武両道を実践している。同大学とスポーツとの密接な関係は、日本でもお馴染みのスポーツドリンク「ゲータレード」(スポーツチーム「ゲーターズ」(Gators) にちなんだ命名)の発祥の地であることから伺える。

日本人アスリートでは過去にゴルフの東尾理子氏が卒業、現在は陸上のサニブラウン選手が在籍しており、サニブラウン選手には、今回の訪問で話を聞くことができた。同選手から、学業とスポーツの両立のための環境が充実し、活用されていることを確認した。

## ② UAA (University Athletic Association) の運営体制

【組織体制】 今回の視察訪問先は、フロリダ大学学長直下に設置された NPO 組織“UAA : University Athletic Association”である。当組織は、フロリダ大学から独立した非営利組織であり、360 人のフルタイムスタッフで 21 チーム 500 人以上の学生アスリートの支援を行っている。大学からは独立しているが、大学と密接に連携しながら運営を行っている(通常、米国大学アスレチックデパートメント (AD) は大学組織内にあることが多い)。UAA のアスレチックディレクターは、①予算、②コーチ雇用、③施設建設、④その他日々の運営に大きな変更をもたらす事項、については大学の承認を得ることが必要であるが、それ以外の日々の運営については決定権を持っている。アメリカンフットボールをはじめとする各スポーツ施設については、Stephen C. O’Connell Center(バスケ、バレー等の試合会場)以外は UAA の所有物であるが、土地はフロリダ大学のものである。

【財政】 UAA の年間収入は約 100 億円以上であり、その約 7 割はフットボール収入(その約 8 割はフットボールチケット関連収入)、約 16%がロイヤリティ・放映権、男子バスケが約 8%、その他となっている。支出の約 3 割がチームの経費であり、フットボールが約 18%、その他チームで約 14%、奨学金 11%、一般経費 24%となっている。構造としては、フットボールを中心に得た収益を全 21 チームの経費や奨学金に充当し

ている。

【ビジョンステートメント】UAAのビジョンステートメントは、「フロリダ大学のブランドを向上させるため、学業、スポーツ、ファンの獲得における秀逸性をもって大学体育プログラムのモデルとなること」<sup>5</sup>としている。これは、ヒアリング時にも再三話題になったことであるが、プロになるのは学生アスリートの数%程度であり、ほとんどはプロスポーツ以外の世界に進む。このため、アメリカ国内でもNCAAがビジネスであるという指摘はあるにせよ、UAAの本来の使命は利益追求ではなく、学生アスリートの学業、競技、ライフスキルの取得支援にある。それゆえ、主にフットボールで得た収益を全21チームの運営費や奨学金に充当するビジネスモデルを成立させている。

### ③ 各セクションヒアリング結果の早稲田スポーツへの活用案

「コンプライアンス」から「施設計画・管理」まで、計10セクションの職務内容のヒアリングを行い、各セクションの役割、具体的な活動、そして今後、本学での大学スポーツ行政の参考となる職務について把握した。各セクションの取り組みは、ライセンスや資金調達、デジタルアーカイブの制作学業支援など、本学においても非常に参考になるものであり、これらを踏まえ、今後の早稲田スポーツの取り組み案として以下の通り整理した。

#### フロリダ大学視察調査の早稲田スポーツへの活用（案）

- ① 早稲田スポーツ関連ライセンス事業
- ② 早稲田スポーツ関連資金調達（寄付金調達）
- ③ 早慶戦シリーズ（仮称）の継続検討
- ④ アカデミックアドバイジングシステムの充実およびカウンセラーの設置
- ⑤ 早稲田スポーツ・デジタルアーカイブの作成・編集
- ⑥ 早稲田大学スポーツアスリート食堂の設置  
※ケータリング、学生アスリート寮へのスポンサー企業からのスナック提供等
- ⑦ 早稲田大学女性アスリートアンケート調査の実施・課題抽出・施策検討
- ⑧ 早稲田アスリートコンプライアンス・啓発ブック作成

<sup>5</sup> “Be the model collegiate athletic program, combining excellence and integrity in academics, athletics, and fan engagement to elevate the UF brand” [http://floridagators.com/sports/2015/12/10/\\_complicance\\_.aspx](http://floridagators.com/sports/2015/12/10/_complicance_.aspx)

#### ④ 施設見学

UAA スタッフへのヒアリングの傍ら、フロリダ大学の関連施設を見学した。大規模で充実したスポーツ施設、試合のライブ配信もできる放送・ビデオコンテンツ制作施設やアスリート専用の学業支援センターを学内に持つなど、いずれもその規模・内容とも日本の大学とは比較にならないほどであった。スポーツ施設には観客席が設置されていることが常であり、ロッカールームや栄養補給バーの配備など、大学スポーツおよび学生アスリート支援に関する先進性が見られた。

##### 【スポーツ施設】



アメフトスタジアム 外観



アメフトスタジアム 内観



選手用フューエルバー  
(栄養補給バー)



アメフトスタジアム VIP 用  
(寄付提供者) 観客席



バスケットボールコート



テニスコート



ゴルフ場



ソフトボール球場



女子ラクロス用グラウンド



充実したトレーニングルーム

【ゲータービジョン：放送・スポーツビデオコンテンツ制作】



ゲータービジョン



デジタルアーカイブルーム



ライブ配信室



ブロードキャストブース

【ホーキングズセンター：学生アスリート専用学業支援センター】



内観



自習用 PC 室



チューターとのセッションルーム



スピーチ練習室

#### ⑤ 大学スポーツ・アドミニストレーターの役割、スキル、マインド

今回の視察にて、フロリダ大学の大学スポーツ行政は「学生アスリートの学業と競技生活の支援を通じ、立派な社会人を育てる」ことを目的として実施しており、大学スポーツ・アドミニストレーターは、そうしたマインドを持って各大学スポーツ行政に取り組んでいる点を確認した。

なお、大学スポーツ・アドミニストレーターのスキルについては、マーケティング、ブロードキャスティング、栄養、学業支援セクションなどについては、それぞれの専門分野の修士号などを持つ人材を配置している一方、コンプライアンス等その他の分野については、特に専門の学位を取得しているとは限らない、又はスポーツ・アドミニストレーションやスポーツ・マネジメントの修士号など関連学位を取得しているようであった。

#### ⑥ フロリダ大学視察結果（まとめ）

アメリカの大学スポーツはともすると利益追求の側面がクローズアップされるが、フロリダ大学・UAA の視察で学んだことは、学生アスリートの成長を促す「教育」が基盤であり、得られた利益はあくまで学生アスリートの学業と競技生活の支援のために創出されているものであることがわかった。大学スポーツの基本が教育であることは、早稲田アスリートプログラムの趣旨と一致するものであり、それを確認できたことは大変有益であった。

また、利益創出のビジネスモデルやその他の取り組みは、NCAA との関係を含む学内における大学スポーツの位置づけや環境・文化の違い等から、日本にそのまま持ち込む事は難しい。しかし、日本の状況を踏まえて応用が可能なものは多々あり、参考となった。

### (3) IMG アカデミー視察

#### ① IMG アカデミーについて

「IMG アカデミー」は現在、世界のトップクラスのエンターテインメント&メディアカンパニーである「WME (William Morris Endeavor)」グループの傘下にある、幼稚園から高校までのスポーツ寄宿学校・スポーツトレーニング施設である。歴史を紐解くと1972年、ニック・ボロテリー氏が始めたテニスの寄宿学校「ニック・ボロテリー・テニスアカデミー」に遡る。ニック・ボロテリー氏は、テニス選手として成長するには技術のみでは不完全であり、共同生活による人格陶冶が重要であるとしてスタートした。しかし、同寄宿学校の赤字経営等により1987年にIMG傘下に入り、最初はテニスのみだったものを他のスポーツにも広げ、8種のスポーツを展開するようになった。

同アカデミーは、アンドレ・アガシ、ピート・サンpras、マリア・シャラポワ、錦織圭など世界的テニスプレーヤーを輩出する、名実ともに世界トップレベルのスクールである。そのスポーツの側面のみが強調されるが、プロ養成所ではなくいわゆる学校組織であり、政府に認められた文武両道の私立学校である。プロになるのは全体の数%のみで、大多数は大学に進学するため、大学スポーツを統括するNCAAを含めた大学進学を見据えた教育を展開している。敷地は東京ドーム50個分程度、アンダーアーマーが公的サポーターとなっているとともに、ゲータレードとも共同開発等の連携を実施している。



IMG アカデミー ニック・ボロテリー氏 (中央)



テニスコート

#### ② 運営について

IMG アカデミーは、長期留学 (1200人程度)、短期キャンプ (ユース～大人、プロ野球チームの春キャンプ等)、イベント運営 (テニストーナメント等) 等による収入や寄付金を財源としている。全世界から学生が集まっており、日本人学生は現在63名在籍、うち27名 (50%弱) がテニス留学である。テニスの錦織選手は公益財団法人盛田正明テニス・ファンドで留学したことは有名である。